

表紙によせて

ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.)

ヤブツバキは本州、四国、九州、南西諸島、朝鮮半島南部、台湾に自生する耐寒性常緑広葉樹で、他に咲く花の少ない冬から春の長期間にわたって花径 5 センチほどの花を次々に咲かせて人々を楽しませてくれる。花は 5 弁で赤くロート状で、サザンカのように平開せず、雄蕊は中央部に筒状にまとり雌蕊を取り囲む。

ツバキの名の由来については諸説あり、厚葉木や艶葉木のように葉の形態的特徴に由来する説や朝鮮名の冬柏（トンバイキ）に由来する説が知られている。学名は植物分類学の祖として有名なリンネが命名したが、属名はツバキをフィリピンからヨーロッパに持ち帰ったイエズス会の宣教師で植物学者でもあるゲオルク・ヨーゼフ・カメルの名をとったものとのことである。

ヤブツバキの花は先に挙げた特徴に加え、横向きに咲くことが多いことや、花糸と花弁が基部で合着しているため、花が散る際にも花弁が一枚一枚散るのではなく、がくの付け根から花全体がまとまったまま落ちることも大きな特徴である。これらの特徴はヤブツバキの繁殖戦略と大きく関連しており、メジロやヒヨドリによって花粉を運んでもらうために進化した結果と考えられている。

まず、鳥に花粉を運んでもらうためには、鳥にとって他の餌の少ない時期に鳥の好む蜜で鳥を誘う必要がある。そのため、鳥の餌となる木の実や虫の少ない冬から春にかけて花を咲かせるようになったと考えられている。また、花の構造は昆虫と比較して体重のある鳥が吸蜜のためにとまっても落花せずに耐えられる構造が必要で、そのため厚い花弁や花糸基部と花弁の合着等の形質を身につけたと考えられている。ツバキは花首からまとまって落ちる性質が忌み嫌われることもあるが、他の花では見られないこのような特徴は、ヤブツバキが進化の過程で鳥を巧みに利用するために獲得してきたものであることを理解することで、ネガティブな印象が払拭されることを期待したい。

社会園芸学科 准教授 樋口幸男